

かわら版  
**哲学たいけん**

第12号  
 編集発行／碧南市  
 哲学たいけん村  
 無我苑  
 所在地／碧南市坂口町3-100  
 〒447-0087：TEL. 0566-41-8522  
 ：FAX. 0566-41-7761



研修道場安吾館の西側に、茶花や野の花の育つ野草苑があり、来苑者の目を楽しませてくれています。植物の世話は「むべの会」という、地元主婦のボランティア活動でなされており、ちなみに「へむべ」は秋になるとアケビに似た実が紫色に熟す山の野生植物の名です。茶花・野草苑の植物には一つ一つに名前が表示してあるので、花を楽しみながら、名前を覚えられ、と来苑者に好評のようです。

**無我苑の茶花・野草苑を  
 ご覧ください**

平成十一年度  
前期哲学講座の記録

テーマ 火の思想 (以下各日のテーマ)

第1回目	エジプトの火の鳥
第2回目	イスラエルの業火
第3回目	エトナ火山での投身
第4回目	イラン高原に燃える火
第5回目	インドの祭火
第6回目	日本人は火葬をいかに受け入れたか

講師 久野 昭 氏 (広島大学名誉教授 国際日本文化研究センター名誉教授)

〈受講者の感想〉

私には少し難しかったですが、このような講座を身近なところで聴けることを有り難く思います。

— 何度も受講しているうちに点が出来、その点と点がつながって線となり、少しずつでも、ものの考え方が変わって来るように思います。ありがとうございます (H・H)

— 古代のエジプトへ、またイスラエル、ギリシャ、イラン高原、インドへとタイムスリップして見させていだいた様な気分です。

人々は苦の中にあつて生命というものの自覚が強かったというのか、救いを求めずにはおれない状況の中で火がどのような大きな存在であったかを私なりにとらえさせていただきました。  
現在の日本では、日常生活が安定していて昨日と同じ今日、今日と同じ明日を疑うことなく過ごしていて、ありがたく思うと同時に、生命に想いをはせる事もないような日々を不安にも思います。  
たいへん良い気分でした。六回の講座を受講させていただきました。ありがとうございます (C・O)



「はじめての座禅」を終えて

▼日時 平成十一年八月二十九日(日) 十時～十一時

▼場所 無我苑 研修道場

▼講師 林泉寺住職 丹羽 康道氏

子ども達にとつては、夏休みも終わりに近い頃ということで、座禅のこの日は親子で体験される方、四、五十代の男性、大学生など、様々な方に参加していただきました。参加者からは、住職にキョウサクで肩を叩いてもらったのが、本当に気持ち良かった、という感想とか、呼吸をする、耳で聴く、鼻で匂いを嗅ぐ、眼で見るといった五感が座禅中は研ぎ澄ま

され、異様なほど意識に上り、何でもなような感覚の働きがいかに並みだたいのことでないか、を思い知らされた、といった声がありました。年に一度の座禅を無我苑で続けてみたいという方のために、次回も座禅の体験を計画してまいります。



座禅風景

伊藤証信の

〈無我の愛〉について

伊藤証信の唱える〈無我の愛〉とは一体何であるのか、という問いに、明確に答えようとすることは難しい。証信について何の知識もない人が、〈無我の愛〉という言葉を知るとすれば、〈無我〉とという言葉にいろいろな想像を働かせるだろうし、その先入観だけで通り過ぎてしまいう言葉ではないか、と思う。

証信の生涯の年譜を見ると明治三十七年、父親を看病する枕辺で靈感に打たれ〈無我の愛〉を悟った、とあり、当時の

心情が以下のような文章に残っている。

「私は疑うことのできるものは悉く(ことごとく)疑いました。壊れるような信念は悉く壊し尽くしました。そうして心の中に何も残らなくなりました。その何もなくなつた心情を名付けたのが『無我の愛』であります。— 略 — それでは、何もないタダの空虚かというところではありません。心の中になにもワダカマリがなくれば、心そのものの活動はますます活発になり、心が活発になれば身体もそれに従います。こうして何らのワダカマリもなくつた心身の自然のハタラクを『無我の愛』と名付けたのです。」

— としてもう少し、この文章を続けると「実はほかに名のつけようがなく、(聞くもに) 仮に、このように名づけたに過ぎません。」『愛と真』第五巻第六号 昭和五年七月」とある。

ひよっとしたら、証信自身にも、この体験そのものを言い表わす適当な言葉が見つからず、〈無我の愛〉はほぼ代名詞的に用いられたのではないかと考えられる。はからずも、仮に名付けた〈無我の愛〉がその言葉の曖昧さ(あいまいさ)故に体験後の思想形成につながっていったことも考えられる。

〈無我の愛〉は前述にあるようにへ心の中に何もワダカマリがない状態を指すが、別の記述を見るとそれは宇宙、万物の仕組みをも指している。

「夫れ、宇宙の本性は無我の愛なり。宇宙を組織せる一切の固体は、その本性に於いて、無我愛の活動なり。即ち、一固体が、自己の運命を全く他の愛に任せ而も、同時に全力を奮って他を愛する。之を無我愛の活動という。」【『確信』明治三十八年六月】



さらに、

「自分の運命を全く周囲の愛にまかせ、自分のもっている力の凡て(すべて)をささげて、周囲を愛するという心情(無我の愛の心)になったとき、…」【『真と愛』第七巻第一号 昭和六年一月】  
 というように、無償の「愛」を中心にして「無我の愛」を説く文章もある。

「無我の愛」という言葉で証信は様々な心情を表わそうとしているのだが、次に注目したいのは、自己と宇宙とが分かたれず、まるで自己＝宇宙のように考えられている点である。この点を考えるために、

以下の証信の文章を参考にする。

「思うに、私の意識というものは、実に不可思議千萬なものと言わなければなりません。一方からみれば、それは無限の空間と、無限の時間とにわたる全宇宙を包括して、余すところのない廣大無辺の統一体ですが、同時に、他方からみるとそれは無限の空間と無限の時間とにわたる、全宇宙のなかのケシ粒よりも小さい一点、稲妻よりも短い一刹那の極めてはかないものとなってしまふのです。それは、一方からみれば、宇宙大自然の主宰であるとともに、他方からみれば、宇宙大自然に翻弄されている一泡沫に過ぎません。この両面は互いに自己の表裏とも言えるもので、そのどれを捨てて、どれを執ることもできません。」【『聖愛』第六号 大正十四年十二月】

この文章から考えられることは、証信は自己の意識というものを、宇宙全体から見た場合と自己から宇宙を見た場合との両局面から捉え、そのどちらともが「私の意識」の現実的な在り方だとしていることである。「無我の愛」が自己と宇宙全体とも受け取れる意味を持つのは、おそらく、「自己」の表裏一体の捉え方、もっと言えば裏と表とを分けず、それらを同一に考えることによつて、「無我の愛」の思想を展開していったかと思われる。(無我苑 大野)

参考図書 「無我の愛―証信の人と思想―」加藤 良平 編

## 本の情報

●原生社  
 「西行」という事

角谷 道仁著

それにしてもなぜ「西行」であるのか。「西行」とは何者であり、何を意味するのか。「西へ行く」ということは、西方浄土、極楽浄土へむかって歩いてゆく事、そして、歩いてゆく人を指し示しているとかんがえられるが、その「西行」が指し示し、象徴するものをわたし(たち)はどのように受けとめればよいのであろうか。(本文より)

●原生社

「親鸞」を読む―原生としての親鸞―

角谷 道仁著

いったい親鸞とは誰か、何者なのか、その思想が「世界思想」として普遍性をもつとするならばどのような位相においてであるのか。(本文より)

●中村久子女史顕彰会

ビデオ「生きる力を求めて」

―中村久子の生涯―

伊藤証信、あさ子氏夫妻とゆかりのある中村久子女史生誕百年の記念ビデオ

(五十分)。

●講談社 編  
 花の事典

野の花―山野の花・自然の花

日本の山野に自生する植物のうち、いけばな花材として使用されている自然の草木を中心に収載。無我苑の茶花・野草苑をご覧になった方が茶花についてより知識を深められるよう、安吾館立礼茶席に置いています。

## お知らせ

茶の湯文化講座

とき 平成十一年十二月十一日(土)  
 ところ 哲学たいけん村無我苑 研修道場

講師 角谷 晃氏  
 ※詳細は広報へきなん、また村民の方にはメールでお知らせします。

新春特別講演会

梅原猛氏と齋藤茂太氏の対談  
 「旅・酒・文化」

哲学たいけん村無我苑名誉村長梅原猛氏と芸術文化村名誉村長齋藤茂太氏による対談型の講演会。  
 とき 平成十二年一月二十三日(日)

ところ 芸術文化ホール エメラルドホール

### 第十三回 瞑想回廊企画展示

テーマ 「色が語りはじめ」  
～安藤玉子作品展～

期間 平成十二年一月十八日(火)～三月二十日(日)

内容 哲学的な絵画作品の展示  
※詳細は広報へきなん、また村民の方にはメールでお知らせします。

### エンカウンター・グループ 「心と心の出会いを求めて」

コミュニケーションを主体とした心理学の新しい技法により、現代人の求める「心と心の出会い」を模索します。無我苑での開催も今回で四回目を迎え、恒例となっております。

日時 平成十二年二月十八日(金)～二十日(日)二泊三日

場所 無我苑 研修道場  
(宿泊 勤労青少年水上スポーツセンター)

※詳細は広報へきなん、また村民の方にはメールでお知らせします。

### 煎茶道具を貸し出しています

お茶会等で研修道場、及び市民茶室を利用される方、お点前に必要な煎茶道具を無料でお貸しいたしております。道具一覧は立礼事務室にあります。

### 来村者の声(アンケートより)

◎自分に向き合う良い機会になったと思う。今はとてもリラックスした気分です。  
(安城市 会社員)

◎日々ストレスが多いけれど、ボディニックを利用してくつろぐことができ、気分をリフレッシュできました。ありがとうございました。  
(安城市 公務員)

◎開苑時間も午後九時まででだなんて、勤め人にも仕事帰りに立ち寄ることができ、うらやましい限りです。  
(名古屋市 講師)

◎雑用に追われた毎日を過ごしていますと、忘れていたものがここで得られたように思います。  
(刈谷市 女性)

◎考えさせられました。  
(岡崎市 学生)

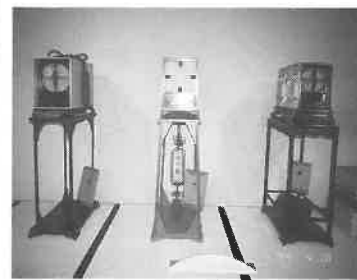
◎もう一度ハイビジョンを見たいと思います。心が和みます。  
(市外 看護婦)

◎無我苑には、もう五年ぐらいずっと来ている。中学の時は受験シーズンに何もかも忘れたくて、そういう切羽詰まった時こそ、自分の空想の世界に浸りたかったし…。なんだかんだ言っって、ハイビジョン「ベルサイユ宮殿」は百回くらい見えました。外見上へ女子高生が私が数えきれないくらいここに来ているのは不思議☆飽きない。これからもずっとあってほしい。  
(碧南市 高二年生)

### フォト

### うぐいすの 声を聴く会

平成十一年四月十八日



鳴き声が共鳴するよう工夫されている籠桶(こうけい)



日本伝統「引仮名口(ひきかなぐち)銘鶯保存会」と来苑者の皆さん



「むべの会」による花の配布

### 編集後記

### 「瞑想のスゝメ」

当苑で初心者向けに開かれる哲学講座の講師をしておいでの加藤博子先生(中央女子大学アジア文化学科講師)が「受講した皆さんはサッパリしたお顔できれいなお辞儀をして帰っていかれる。その様子が、ふと温泉帰りのような風情に見えたとき、この『哲学たいけん村』の位置付けが分かったような気がした。ここは心の温泉なのだ。」(中日新聞夕刊『千字百花』平成十一年二月五日)とお書きになっているのを拝読した時、「心の温泉」という言葉の中に、日常生活とは切り離された場所のニュアンスを感じ、さらに「碧南の『哲学たいけん村』は熱い秘湯である。」の「秘湯」にふと、隠された空間のイメージが浮かびました。

無我苑は人が寝る前に読む小説や、女性が眺めて楽しむ植物のように、心を和らげてくれるもの、くつろいだ気分であらうと訪れていたたく所です。多忙な日々の中、時には立礼茶席でお茶とお菓子を味わったり、畳に座って漫然と庭を眺めたりする時間があったらいいと思います。時間泥棒と少女の物語『モモ』を書いたミヒヤエル・エンデは「時間とは生活なのです。そして生活とは、人間の心の中にあるものなのです。」と述べています。が、生活に潤いを持たせるには、ゆったりと自分を見つめるような時間が大切だという意味に受け取れます。

(無我苑 大野)